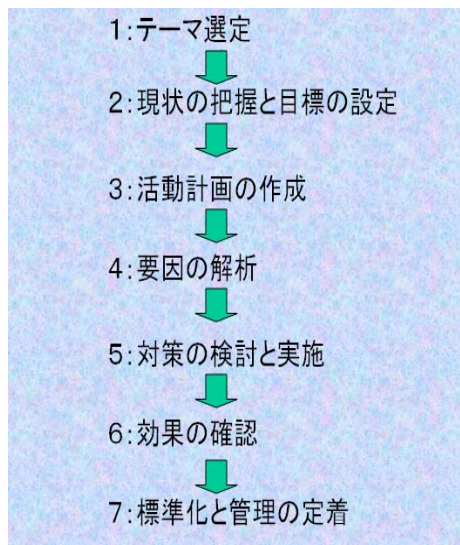


(記述)の使い方を教えたりという経験からリーダーシップ力を高めることになり。また、自主的な活動であり、上司からの命令でテーマを決め、取り組むわけではありません。自分たちで問題意識を持ち、「いかに職場を良くしようか」「問題を解決しようか」「患者様のために何が出来るか」と考え行動するのです。やりがい・働きがい・生きがいが一番感じるのは、このような自主的な考え方で自主的な行動が出来る時だと思います。また、モチベーションも上がり、サークルメンバーで 1 つのテーマに取り組むことは、コミュニケーションの向上にもなり、それが明るい職場つくりにつながります。

次に、具体的な活動内容ですが、小グループの人数は、QC サークルの大きさ、効果的に進めるためには一般的には 5~7 名程度が適当と言われています。これより多いと発言しない人、参画しない人が出てきます。

そして、進め方は、このサークルの活動のなかで事実・データに基づいて話し合ったこと、勉強したことなど、PDCA (計画・実施・チェック・処置) という 4 つのステップを確実にしながら、いろいろな手法を使って分析し改善をしていきます。手法には、問題の原因を追究して解決する「問題解決型」と、これからこのようにしたいという課題を達成するための「課題達成型」があります。



<問題解決の手順>

また、現象を数値的、定量的に分析するための技法として、QC七つ道具 (パレート図、特性要因図、層別、チェックシート、ヒストグラム、散布図、管理図・グラフ) があります。これらの道具を使い、見ただけで内容が理解できたり、道具をいくつか組み合わせて使うことにより多くの問題に対処できます。

最後に、その内容をまとめて発表します。発表することにより、上司や他の職場の仲間にも認められることにもなります。これが、

自信とやる気につながり、活動がより一段と活性化していくわけです。

働く職場に期待されることに、品質向上、原価低減、効率化などの成果をあげることがあります。自ら考え、自ら学び、自ら行動するこのような QC 活動は有効な活動の一つではないでしょうか。

※ 参考文献：財団法人日本科学技術連盟「QC サークルの基本」

【相山 広美】

\*\*\*\*\*

### ◇ 負けざる者たち・・・ インビクタス

学生時代にラグビーに魅了されて学生ラグビー、社会人ラグビー、壮年ラグビーと渡り歩いて 30 数年、遠くはフランス、アメリカ、ニュージーランドにまで試合に行きました・・・。

と自慢する割にはラグビーを始めた動機に若干の嘘があります。(笑)

大学に入学して、四国の田舎町から出て来た純粋無垢?な私は、恐持てラグビー部の先輩に「練習は月に 6 回くらい」、「女の子にもてる」「色々なコンパから誘われる」「試験問題の傾向や資料が手に入れ放題」「部の顧問の先生の教科は落第なし」と両脇から腕を掴まれ逃れないような体勢で、その半分以上が不純な内容の誘い文句に「まあ、断ると怖そうやし、グラウンドに練習風景を見に行く位なら」と感でホイホイ乗って(騙されて)入部したのがラグビーとの出会いでした。

また体育会系の大学と違い医学系の大学の運動部であるから軟派な感じなんだろう。とタカを括っての入部でした。

しか〜し、そこに待っていたのは、練習は月では無く週に 6 回、残り 1 日は試合、色々なコンパからは誘われる。どころかラグビー部員と分かっただけで、ご遠慮願われる。女の子には雑巾を見るような目で見られ、全くもってない。

またチャラチャラした軟派なサークル活動を想像していたのは大間違いで、その地区の一般大学が参加するリーグ戦グループに医学系大学としてただ 1 校所属しており、ラグビーシーズンの秋から冬にかけては朝練習、夕練習の 1 日 2 回の練習まであり、衛生学部ラグビー学科と陰で囁かれるおまけ付きでした。

極めつけの夏合宿は人里離れた山中の合宿所でお盆から 8 月末まで収容隔離され、そこでのラグビー部 OB からのありがたい心のこもった練習は「ああ俺はここで死ぬんだなあ・・・」と遠ざかる意識の中で感じる地獄のような毎日が続くというものでした。

ではこんな思いをしてまでどうして続けたのか?それはラグビーという競技でしか味わえない精神性がある(に縛られるかもしれない)としか言えません。

スポーツの中で防具をつけず生身でボールを持っている人に強引にタックルし、押し倒してでもそれを奪って良いのはラグビーだけでしょう。それに耐える体を作る練習の毎日は、同じく甘言に騙されて?入部して来た劣等生ぞろいの同輩達との友情、顔は怖いが面倒見の良い先輩達との交流、自身の体の痛みと同時に相手の痛みを感じ取る感性の芽生えなど、そこには独特の優しさが培われます。部を辞めたい。と思うのは毎日ですが自分が抜けた後、部員不足の部の状態を思う責任感、2 年、3 年の経過と共に後輩もでき、苦勞を共有している部員を裏切れない。など人間として社会を生きて行くのに必須な感覚や考えが身に染み付きました。この事を 50 歳を過ぎた今、強く感じた映画を見ました。「インビクタス/負けざる者たち」という映画です。

「INVICTUS インビクタス」とはラテン語で征服されない、を意味するそうです。南アフリカの黒人初の大統領となったネルソン・マンデラが 27 年間にもおよぶ政治犯として、海の孤島に作られた刑務所に繋がれていた時に、彼が獄中生活で支えとしていた詩の題名が「インビクタス」です。英国の詩人アーネスト・ヘンリーの詩ですが、その長文の詩の最後に「門がいかに狭かろうと いかなる罰に苦しめられようと 私が我が運命の支配者 私が魂の指揮官」これは、自分に降りかかる差別や偏見を運命とあきらめる事なく自分自身で人生を開拓していくという意味でしょう。

この詩を支えに永き獄中生活に耐えて後、民主選挙でマンデラが大統領になった当時、南アフリカは黒人大統領の誕生により、白人との対立が激化し国としての誇りを失いかけていました。また南アフリカラグビー代表チームの 40 人はスプリングボックスというチーム名で呼ばれそのほとんどが白人で占められていました。当時、チームは弱く、倒れた相手の顔をスパイクで腹いせに踏みつけるなど乱暴なプレイでラグビー界では嫌われ者。国民からは国の恥とまで言われており、南アフリカ国内の黒人は対戦チームがトライすると大喜びする有様でした。

南アフリカで開催が予定されていた第 3 回ラグビーワールドカップの 1 年前、白人キャプテン ピナールに黒人であるマンデラがこの誌の精神を吹き込みそれに感動し共鳴したことにより彼はチームの建て直しを計り、スプリングボックスはその大会で決勝戦まで駒を進めて、当時、世界最強とされていたニュージーランド代表オールブラックス(日本代表も本大会に出場し対戦して NZ145-17JPN という歴史的な大敗を喫し日本のラグビー熱が一気に冷めた)に勝って優勝(南ア 15-12NZ)した実話です。人種間対立はラグビーの大会で優勝して国が一つにまとま